

## 岡山実験動物研究会 2013-2014 年度会長の新任によせて

A greeting from new president of Okayama Association for  
Laboratory Animal Science (2013-2014 fiscal year)

織田 銑一  
Sen-ichi Oda

岡山理科大学理学部動物学科

Department of Zoology, Faculty of Science, Okayama University of Science

岡山実験動物研究会は 1982 年に創設され、2012 年 11 月 30 日に 30 周年記念の第 64 回例会が開催されたところ。三谷会長の勇退の後を継いで、31 年目に会長を引き受けることに光栄とともに躊躇がありました。創立以来の経緯をあまり理解していないものがやることは、かえってヘテロ性が出せて新味が出るかもしれないと思に至るようになった次第です。

少し自己紹介をさせていただきます。名古屋大学農学部(家畜育種学講座)を 1969 年に卒業し、修士課程、博士課程に進学し、1974 年に名古屋大学環境医学研究所の助手、1992 年から名古屋大学農学部に出戻りしています。その後 2010 年 4 月に岡山理科大学理学部動物学科に異動してきました。農→医→農→理と異なる雰囲気のある学部・研究所を歩いてきたこととなります。その間の 1985-86 年には米国・ジャクソン研究所で過ごしています。卒論と修士論文は、ニワトリの羽色を制御する blue 遺伝子の発現について、色素細胞を発生遺伝学的に観察しました。博士課程ではマウスのミュータント系育種を手がけ、疾患モデルとして歩行異常、眼球異常、四肢異常、骨格異常、等の系統を育成しています。学位論文としては「マウスの新しい小眼症ミュータントの遺伝育種学的研究並びに発生学的研究」というものでした。博士課程に入ってから「食虫類の実験動物化」をサブテーマに掲げて野生動物の調査や捕獲にも目を向け始めました。その流れとして岡山理科大学の動物室にはマウスのミュータントやジャコウネズミ(スクス)といった動物達が系統保存されている訳です。名古屋大学環境医学研究所では外的因子(環境)と内的因子(遺伝)との相互作用としての発生発育異常(初期胚から胎生末期、生後の行動発達)の研究に従事しました。名古屋大学農学部では山地畜産実験実習施設という愛知県東部の山間地の施設に所属し、在来牛である口之島産再野生化牛や在来ヤギのシバヤギの繁殖集団の育成に取り組むとともに、山間地という地の利を生かして野生動物の研究にも取り組みました。全国から大学院生が参加してくれ、博士後期課程の院生の方が多かったです。出戻ってから定年までの 18 年間(1992 年 10 月から 2010 年 3 月まで)に、延べになりますが、学部生 36、修士院生 33、博士院生 19、学部研究生 9、修士研究生 3、博士研究生 5、が所属してくれ、その内の留学生は 6 名(韓国、ロシア、内モンゴル、バングラデシュ、中国、モンゴル)、他に短期の外国籍共同研究者は多数にのぼります。博士学位取得者は 16 名になります。彼らの活躍のおかげで幅広い動物達と付き合い、その形態や機能・現象の面白さに出会うことが出来ました。実験動物関係で言えば、長く東海実験動物研究会の世話人や事務局を担

当しました。ミュータント系のマウスやラットの保存は一貫して継続していました。新たに実験動物化した動物達も維持してきています。平均的には 40 系統 2000 匹を飼育していたこととなります。

さて、岡山実験動物研究会ですが、この会は猪 貴義先生、永井 廣先生、倉林 譲先生の呼びかけで 1982 年 12 月 7 日に 26 名で発会式が行われ、初代会長に猪先生が推挙されています。実験動物と動物実験に関する情報交換の場として、また地域の科学の進展に寄与することを目的に例会がおこなわれてきています。岡山大学の医・歯・薬・農・理・文・教育・旧教養部、川崎医大、岡山理科大学、ノートルダム清心女子大学、林原生物化学研究所、重井医学研究所、環太平洋大学、その他の研究機関、民間企業の支援により歴史がつけられてきたということです。時々の文章や記録は時の経過により歴史となって残る、というように「岡山実験動物会報」は確たるその証人となっています。この 30 年の歴史は佐藤勝紀先生(岡山大学名誉教授・本会名誉会員)が特別講演「岡山実験動物研究会 30 年のあゆみ」で述べられていることですが、30 周年も記録にまとめていただけることでしょう。

猪先生は 23 年を経過した段階で「岡山実験動物研究会の原点を探る」という文章を寄稿されており、その中でマンネリ化を戒められていますし、「大学や学部、研究機関の枠を超えて、実験動物と動物実験に関心のある方々の集まりの場として、自由の立場から討論し、相互の知識と情報の交換に役立てようという考えから生まれたものである。」と強調されています。先進的・速報的な業績を学ぶことはもちろんですが、ヒト以外の生命利用における倫理や哲学を身につけることが強調される時代でもあります。技術者の方々の日々の工夫の発表もしたり、学生・大学院生の発想に対しても議論できるサロンの雰囲気も必要になっています。原点をふりかえりつつ、今ひとつ会長として次のような例会がつかれることを望んでいるところです。

- 1) 若手の交流の場をもっともっとつくりだす。研究の発想を語り、また発表の練習の場として利用してもらい、次の世代を担ってくれる技術者・研究者として成長してもらおう。
- 2) 例会の多様化をはかり、臨時例会の開催も望むところ。例えば、修論や卒論の交流会にパーベキュー大会もよいでしょう。生命を実感するために食肉市場や動物愛護センターの見学もよいでしょう。現職技術者の声も聞きたいし、技術の交流の場もよいでしょう。
- 3) 近隣大学・研究機関との交流をさらに活発にする必要があります。岡山県立大学などの中小規模の動物実

験を行っているところにも呼びかけ、各研究機関における動物実験委員会の活動交流を展開することです。

4) 関連研究会との交流や合同例会も企画してよいのではないのでしょうか。バイオアクティブ研究会などは動物実験も行っている方が参加されています。工学系の研究会との交流も望まれます。

5) 高校生や一般の方々の参加が出来るような開かれた研究会にしていくことが今後は求められてくるかもしれません。こういう方々には会費はいただかなくてもよいのではないのでしょうか。

6) 中国四国地区の実験動物関係者との交流は今後も深めていく必要があります。全国には11の地方研究会（北海道実験動物研究会、東北実験動物研究会、筑波

実験動物研究会、静岡実験動物研究会、信州実験動物研究会、東海実験動物研究会、北陸実験動物研究会、関西実験動物研究会、岡山実験動物研究会、九州実験動物研究会、琉球実験動物研究会）があり、さらに静岡県立田方農業高等学校の在校生と卒業生を中心とした伊豆実験動物研究会があります。中国・四国地方の実験動物関係者全般を対象とした研究会は出来ておらず、将来的にはこの地域を包括した研究会に発展してもよいのではと考えています。

以上、まとまりのない就任挨拶となってしまいました。が、今後の2年間、岡山実験動物研究会の更なる活性化のため、皆様の協力を切にお願いする次第です。